

■野狐二次 (後篇六卷)

帝キネ芦屋時代映畫

第二百拾壹號

紹介

前篇は一寸氣が利いて居る所があつたが後篇は態さらしいお芝居澤山で餘り好意が持てなくなつた。お糸の道中に起る危難の數々など執拗

こくつてやり切れない。火事場の喧嘩は譯もなく騒然たる立廻りで眼が痛くなつたが修羅の巷だからあの位で好いのであらう。親子の對面を終にさせないのは此映畫の御客様は不満であらう。其他は前篇と同じ。山本 綠葉 | 興行價值 | 火事場の喧嘩はお客様が御待乗騒々しい鳴物入ですれば一層受ける事確かである。(十壹月十九日、大阪芦邊劇場封切)